

相馬 黒光 小考

本学に勤務して五年になろうとしている。一般教育「歴史Ⅱ」で日本近代を中心とした女性史をとりあげ、女性の地位向上、男女平等を念頭に、学生と研究してきた。その間信州の女性にも目を向けて、毎年巡見を実施したが、一年を除き安曇野の穂高町へ行き、相馬黒光、研成義塾の女性教員青柳さく子や女生徒の生き方や生活の有様を实地に研究し、学生たちは大学祭(六鈴祭)で展示発表したこともあった。筆者は相馬愛蔵・黒光夫妻や井口喜源治らについて「歴史Ⅰ」でとりあげたほか、東京都文京区成人学校の筆者自身の企画による「歴史講座」で二度講義した。

ところが愛蔵・黒光らに関する研究、ことに長野県関係の先学の論述を読み、多くを教えられた一方で、歴史研究の初手である史料批判の欠除、黒光らの回想録を鵜呑みにした事実の誤りや評価への疑問、その他の問題点が気になった。⁽²⁾ 小論はそれらを取りあげつつ、若干の整理と考察を試みようとするものである。小論は日本近代女性史研究の視点から、黒光の誕生から順次とりあげていき、穂高からの出京を下限とする。

一、星良の生いたち

相馬黒光、旧姓は星、名はりよう、通常良が当てられ、良子と

も称した。黒光はペンネーム等に使われた。ここでは良を多用する。

良は一八七五(明治八)年九月十一日星喜四郎・己之治夫妻の三女(四男四女中の)として、仙台は広瀬川畔の崖上に近い本材木町西裏末無に誕生した(一九五五年歿)。一八五六(一八五九)年(安政三)に作成された「安政補正改革仙府絵図」には、良の生家は「星雄記」と記載されている。雄記は良の祖父である。良の生家は本材木町・木町間の路地を西にはいり、南に折れた本材木町の町屋裏の突き当たりであって、住所の呼称通りである。その地点は青葉区立町八番地の立町小学校や同九番地のYMCAの北、十八(十九番地辺り)と推定出来る。⁽⁴⁾ 現在そこは仙台市街中心部の一画である。旧藩時代には川畔崖上に並ぶ大身の屋敷に近く、川を隔てて青葉山の城郭が聳えて見えた。

星家は儒家で禄高七十石、大藩の伊達六十万石では小身ではあったが、良が祖母サダ(通常、定と記されている)から聴かされていた通り、雄記は有能な人物で、拔擢されて評定役・勘定奉行などの要職を歴任した。彼は藩学養賢堂の学頭大槻磐溪と親交があ

成* 澤 榮 壽

った。磐溪は開明的な儒者で、開國論に与し、藩が奥羽越列藩同盟の主軸となることに反対して敗れ、下獄した。蘭学者大槻玄澤の子、国語学者文彦の父である。⁽⁶⁾養賢堂学頭は「大番頭格待遇の輩」で、若年寄・評定役等と共に文武行政担当奉行に直属した。勘定奉行は財用取切奉行・出入司に支配された。⁽⁷⁾雄記が大学者と親交があったことは彼の人物が一廉であったことを示しているよう。雄記は一族と共に青葉区柏木三丁目七番地、曹洞宗微笑山江嚴寺の墓地に眠る。

喜四郎は養子である。養父の影にあって何事も消極的な態度をとった。彼の実家多田家は砲術をもって藩に仕えたが、黒光自身は子供心に「奇異」に感じたと同想しているように、多田家からは少なからざるキリスト者が生まれていた。⁽⁸⁾なかでも喜四郎の長姉の長男笹川定吉は明治初年のキリスト教弾圧で投獄されながら信仰を深め、仙台ハリストス教会を主宰し、ながく長司祭を勤めた。長兄の長男多田清介は早逝したが、七三年、仙台カトリック教会の基礎を築いた人である。⁽⁹⁾黒光はこうした父の実家「一族の血の中からうけついでもの」を吾が身を感じていた。⁽¹⁰⁾

良の母已之治は雄記・定夫妻の三女である。彼女は明治維新を境に没落の一途を辿る星家の大黒柱になった。仙台藩は明治新政府に抵抗し、戊辰戦争の際奥羽越諸藩の盟主となったから、一八六八（明治元）年二十八万石に減封されるなど、維新改革期に不利な処遇を受けた。士族は下級官職も得られず、没落が顕著であった。雄記は例外的に官途に就いたが、剛直で潔癖な性格は時勢に合わず、間もなく隠居した。一家は貧窮の度を強め、八五年の雄記没後、それは一層深刻なものとなった。已之治は機織りを稼いだが、売り食い生活を余儀なくされた。やがて良のすぐ上の三兄、少年圭三郎が県庁の給仕に雇われて家計を助けた。喜四郎は

一時職に就いて单身赴任したが、九〇年病を得て帰省し、翌年死した。

その間良は八三年に片平丁小学校（初等科）へ入学した。八二年入学説もあるが、八三年が正しい。諸書に尋常小学校とあり、黒光もそう認めているが、彼女は尋常科（四年制）には通っていない。当時の小学校制度は七二年の最初の学制がそれぞれ四年制の上・下等としていたのを改正し、八一年の小学校教則綱領で初等科三年を義務教育とし、四〜六年を中等科、七〜八年を高等科と定めていた。⁽¹¹⁾良は初等科へ入学したのである。仙台でも東二番丁小学校・木町通小学校などと称し、尋常の文字は見られない。尋常小学校という記述は、黒光の回想では許される、と言うより、煩わしさからして当然でさえあるが、歴史研究の叙述では認め難い。⁽¹²⁾

同小学校は現在も同じ校名で同じ場所に存在する。所在地は青葉区片平一丁目七番地である。良の家からは一〇〇メートル余り南の広瀬川畔崖上にあり、彼女は三年間通学した。片平丁小は、開校当時、六八（慶応四）年に養賢堂学頭添役（副学頭に相当）だった岡千仞が開いた麟経堂を校舎とした。麟経堂の学風を受け継いだ同小学校は仙台屈指の所謂名門校で、各界で活躍した人物を輩出し、黒光は志賀潔等と共にその一人に教えられている。⁽¹³⁾因みに道路を隔てた西南に中国の文豪魯迅が在仙時代（一九〇四〜六年）に下宿した陋屋が現存している。

初等科を卒業した良は、貧困のため上級進学を断念させられ、一年間裁縫を習いに行き、翌八七年東二番丁小学校へ入学した。前年学校教育の国家主義的再編を目的に学校令が制定され、その一環として小学校令が公布されて尋常小学校程度・高等小学校程度が共に四年制となり、前者が義務教育とされた。⁽¹⁴⁾仙台の場合、

上杉山通小学校では八七年十月に小学校令を実施、外記丁尋常小学校と改称し、翌月文部省令第八号学科程度を実施、小学校在学年限を八年に分け、前四年を尋常科、後四年を高等科として、同月「高等科ニ入ルヘキ生徒八十四人ヲ出」した。良が入学した学校は七三年の設立で、七九年から東二番丁小学校と呼称し、八六年直ちに尋常高等併置校となった。正式の校名は東二番丁尋常高等小学校だったのではなからうか。⁽¹⁶⁾ いずれにせよ彼女は初等科三年をおえただけで、高等小学校程度の課程へ入学したのである。

良が通学したその場所に今も東二番丁小学校が存在する。仙台駅から西へ数百メートル、良の家からは約一四〇〇メートルの地点の大通りに面した繁華街にある。現在の町名は青葉区一番町二丁目一番地である。仙台最初の幼稚園を併設した、これまた所謂名門校の小学校で、良は成績抜群、入学年次に飛び級し、高等科の課程を三年間で卒業した。普通八年間要する課程を彼女は六年間でおえたことになる。遅れを取り戻したと言われているが、取り戻して余りがあったのである。

二、キリスト教との出会い

東二番丁小の南隣、現在の一丁目二番地に仙台基督一致教会があった。そこは今、大成火災海上ビルになっている。良は一八八九年一月六日にこの教会で洗礼を受けた。高等科卒業の前年である。仙台東一番丁教会所蔵の綴「第壹号会員名簿 仙台基督一致教会」を見ると、「仙台市元材木町末無」の「星己の治」、「仙台市元材木町」の「星サダ」、同「星リョウ」、すなわち良の母・祖母・本人の順に三人続いて綴られている。受洗は同時である。この日受洗したのは三人のほか、同教会の牧師をしていた押

川方義の長男方存（のちに冒険小説家として知られる春浪）ら五名であった。⁽¹⁷⁾

ところで黒光は洗礼式の様子を「広瀬川の畔」で回想し、押川から受洗したと書いている。⁽¹⁸⁾ しかし右「会員名簿」、さらにその原簿である「明治二十一年四月一日ヨリ」の「受洗入会者扣帳」によっても、良自身や押川の長男を含む右八名への施洗者は押川ではない。「米国人ホーイ」・「ダブリエーホーイ」などとなっていて、W・E・ホーイ (William Edwin Hoy) であることが知られる。⁽¹⁹⁾ 黒光が受洗したのは正式にはホーイなのである。この点を最初にあきらかにしたのは論文では宇津恭子氏であるが、少し立ち入って仙台基督一致教会の「会員名簿」を通覧すると、押川に混ってホーイを含む臨時に洗礼を授けた牧師の名が見える。東北学院史料室所蔵「宮城中会記録」の前年十二月十日付記事に「押川氏近日洋行セラレントス」とある。押川が米欧視察のため仙台を発したのは良受洗の年の三月二日であり、これに先だって牧師を辞任したが、いつかは定かでない。出発まで間があり、ホーイの臨時的な施洗と見るべきであろう。良らの受洗の日に既に辞任していたとしても、この年の早い時期に受洗者がきわめて多いのは押川が出国し、教会主宰の立場を離れることからの「駆け込み」のためであろう。彼は一年余りのちに帰国したが、長老として留まり、牧師に就任しなかった。⁽²⁰⁾ 黒光の記憶は正しいとは言いが、彼女が師と仰ぎ多大な薫陶を受けた押川の印象が強烈で、誤って叙述したとしても充分理解出来ることである。

良のキリスト教との出会いは、後年自らが書いているように、小学校（初等科）時代、賛美歌の声に引き付けられたのを契機に、保護者の許可も得ずに日曜学校へ出入りし、祖父をはじめとする家人の反対に逆らって教会の礼拝に通い始めたことにある。⁽²¹⁾ 明治

初期キリスト教が発展し出していた仙台で、教会の歌声が感性鋭い少女の琴線に触れ、勝気な彼女が己が意志を通せたことは幸運であった。また良がキリスト教への関心を強めていったのには、キリスト者を多く出している多田家一族との奇縁にもよるが、母方の著名な叔母の存在にもよる。

多田家一族のうち、良に直接影響を与えたのは父の次姉佐藤かね（通常、兼と記されている）である。彼女は星家三代の女性より早く仙台基督一致教会の会員になっていた。同教会「第二号会員名簿」を見ると、兼の受洗は八四年七月二十五日、授けたのは押川である。⁽²³⁾ 兼は当時もその後も家庭的には背負い切れない程の不幸があつたが、良にとって心温かい伯母であつたし、己之治にもやさしい義姉であつた。⁽²⁴⁾ なお兼について一言すれば、黒光は彼女が教会の長老を勤めた⁽²⁵⁾と認めているが、目下確実な史料は見当たらない。

一方の母方の叔母は佐々城豊寿である。彼女は雄記・定の五女、本名をえん（通常、艶と記されている）と言った。豊寿はキリスト教主義の女性の地位向上をめざす婦人矯風会の中心メンバーとして活動したことで知られる。良は、男女平等を論じ、娼妾全廃を主張し、慈善事業に東奔西走する剛直で能動的な叔母に一種の憧れを抱いた。

二人のおばは良と彼女の母・祖母へ直接・間接入信を働きかけた。それを良が積極的に受け留め、三人同時の受洗となつたのである。

良は祖母の想い出話を通して星家に誇りを持っていた。士族意識が強かったと言ってもよい。しかし現実には一家は没落して貧困に喘ぎ、肉親に、入信後も続いたが、不幸が絶えなかつた。こうした家庭の事情が多感な少女の苦悩を深めさせ、苦悩が彼女を

キリスト教と結び付けた。

受洗前教会へ通い始めて掛け替えない二人の師に恵まれたことは大変な幸運であつた。一人は言うまでもなく押川であり、もう一人は彼の愛弟子島貫兵太夫である。

押川方義（一八五〇―一九二八）は伊予国（愛媛県）松山生まれ。東大の前身開成学校等を経て、一八七一年横浜英学校に入學、翌年受洗して日本基督公会創立に参加し、七五年から東日本各地へ伝道に赴き、八〇年仙台区（仙台市）内に基督教講義所を開設、吉田亀太郎とともに本格的な東北伝道を開始した。翌年最初の洗礼式がおこなわれ、同日仙台教会が創立した。八五年押川のリードで仙台ほか東北の三教会が日本基督一致教会に加入し、仙台基督一致教会は八七年東二番丁南町通角に移転した。⁽²⁶⁾ 良が受洗したのはここである。

これより先、八五年押川は吉田とともにホーイを東京に訪問し、仙台にキリスト教主義の学校を創設する必要を説いた。ホーイはアメリカ合衆国のジャーマン・リフォームド教会（ドイツ改革派教会）の三人目の来日宣教師である。彼は仙台視察後二人の先任者と協議し、翌年仙台へ赴任した。そして合衆国ドイツ改革派教会の在日宣教師団の日本基督一致教会協力ミッションへの加入を経て、同年五月仙台神学校が設立された。神学校は仙台基督一致教会の西に隣接して建てられた。押川・ホーイの両名が仙台神学校の創立者で、神学校は九一年東北学院と改称、翌年理事会が組織されるに伴って、押川が院長に就任し、ホーイは理事長に相当する局長となった。すでに韓国伝道に乗り出していた押川は、一九〇一年院長を辞任し、彼の地での宗教活動の資金調達を目的に事業を興して失敗、晩年は代議士二期を勤めた。一方ホーイは一九〇〇年に局長を退き、中国へ渡って伝道と教育と社会事業に盡力、

二六（大正十五）年国民革命軍の所謂北伐に巻き込まれ、翌二七（昭和二）年合衆国政府の命令で本国へ引き揚げる途中、太平洋上で死去した。⁽²⁷⁾

一九三八年黒光は四十数年ぶりに帰省し、故郷を回想して「往年の広瀬川を訪う」を書いてゐるが、押川の墓前に額突いた段はとくに情感が籠められており、恩師に対する彼女の変わらぬ深い敬愛の念が理解される。「共同墓地のある輪王寺に至れば、さらに一段と高きところに、恩師押川先生の、自然石より成るお墓がすぐ眼につきました。あつ先生と、思わず走りより、跪⁽²⁸⁾」き、押川を中心とするキリスト者の群像に思いを馳せ、「ここには墓碑を繞⁽²⁹⁾って涸れざる青春がある」、「維新後ようよう二十年の時代の若き日本、特に暗い東北の天地に、雪解の春の一時に訪れたような、揺りさまさる魂の感激と」「何やら高い香気のようなものが、ふっくりと私をつんで残るのです」と記している。そして黒光は「晩年が不遇であつた」押川の「事跡を知る人も少ないようです」と、彼の履歴を縷々認め、そのなかで押川が熱誠をもつて東北伝道に如何に努力したかを切々と訴えているのである。⁽²⁸⁾

東北学院長辞任間もない頃の押川について、松村介石は「今日海外教育其他の事に従ふて猶ほも大望を抱いて居る様だが、如此大物に為ると兎角区々碌々たる宗教家や俗人とは相容れぬもので、誠に惜しむべき人物である」、「彼は今後」「如何に変ずるとも彼が愛國憂國の情を懷いて何時でも其の身を殺さんとして居る事丈けは」間違ひなく、「縦令ひ失敗を為しても、よしんば少々不都合を為したと言っても、彼は己れ一個の功名利益の為めでなく、其の憂國の大業より打算し来るものである」と紹介した。⁽²⁹⁾この人物評は、一方では心を揺り動かす雄弁をもつて個人の精神的救済をはかる押川の、自ら成し遂げようとする事業を、困難にぶつかり

失敗しながら、自ら揮毫する言葉「直知直達」の通り、野心的に次々と実行していかうとする性格を欠点を含めて的確にとらえ、国家主義への傾斜を暗示的に、しかも肯定的にあきらかにしている。黒光はこのような傾向をもつ彼のスケールの大きさに英雄的魅力を感じ尊敬の念を禁じ得なかつたのである。

島貫兵太夫（一八六六—一九一三）は陸前国岩沼郷（宮城県岩沼市）生まれ。一八八〇年十三歳で下等小学校に入學し、翌年卒業、十四歳で近隣の小学校助教となり、小学教員資格試験に合格して、翌年母校小川小学校の訓導に就任した。八三年宮城師範学校に入學したが、二ヶ月で退學し、八四年母校へ戻り、中等科訓導試験に合格して、十七歳で植松小学校（現名取市）の校長（六等訓導）に着任した。同年増田町高等小学校（現名取市）の首席訓導に転じたが、八六年に退職して周囲を驚かせた。二度目の母校在職中に仙台で押川から受洗していたのである。彼は同年仙台神学校へ第一期生として入學、九四年東北学院英語神学部を卒業した。⁽³⁰⁾彼と良との出会いはその間のことである。

卒業後、島貫は在学中から携わっていた仙台のスラム街での伝道と救済に従事したのち出京し、翌年日本橋元大工町基督教教会牧師となった。九六年教会を神田へ移し、神田基督教教会と改称、彼はここを拠点に、底辺労働者をはじめとする貧民救済、韓国伝道にとりくもうとしたが、地域性がらみで苦学生援助を最大の課題とした。そのため、島貫は翌年東京苦学生救助会を設立、これは二度の改称を経て、一九〇〇年から日本力行会と呼称された。力行会の目的は「貧窮なる男女の学生を補助周旋し自給勉学其志を成さしむる」ところにあった。力行会は自らの意志と実力で生涯を切り開いていくための移民にも力を入れた。⁽³¹⁾

黒光は「神学生たちの総元締という格」の「島貫さん」に「十

二、三歳から「押川先生の厳然と控えられる前で」⁽³²⁾「キリスト教の教育を受けた」、「親も及ばぬほどの世話」になった。島貫歿後十年目、島貫の建碑記念会が開催された頃、黒光は「兄なる島貫師」なる追憶文を書いている。島貫の良宛書翰（一八九一年）を紹介しつつ、「此夏休暇、私は、子供としては堪え難い程の重荷を負つて悩んでゐたので、兄は殊に多大の注意を払はれたのです。一日一回或は二回位の割合で書かれたのです。僅か小学校を卒へた許りの十五六才の一少女を、かく迄信じ且重んじて凝視してゐて下さつたといふことは、如何して私の魂を動かさずにゐられませう」と認めた。

押川と島貫は感受性の強い良が折れ、曲がらないように親身に相談に乗り、導いた。筆者がこの項で良について二度まで幸運と書いたのは、彼女が生きる道を見出し得たのも、幾度となく躓いて起きあがれたのも、キリスト教と出会い、二人の師に巡り合えたためだからである。そして良が、愛蔵と共に、社会的弱者を含めて困難を抱えている人たちに對し、慈善の域を超えて援助し、社会的・文化的に意義あり価値ありと認めた活動に對し、ときには危険をも省みず、惜みなく協力したことは、両師の精神を継承した側面である。しかし自らの史観を立てず、黒光に倣つて押川を一面的に高く評価している論考は、歴史研究として問題だと言わざるを得ない。

三、三つの女学校——とくに宮城女学校

良は一八九一年創立五年目の宮城女学校へ入学した。高等科卒業一年後、父親生前のことである。黒光は最初東京の明治女学校への入学を熱望していたと書いている。しかし良は「あんなに勉強したがるものを遊ばせておいては可愛相だ」という両親の温情

で地元の女学校への入学を許可された。⁽³⁴⁾

宮城女学校（現宮城学院）は八六年九月東二番丁五十一番地に誕生した。神学校と兄妹校である。創立の契機は、押川と吉田が新しく来日したホーイと会話し、彼の先任宣教師とも会談して、神学校と共に女学校の設立を合意したことにある。合衆国ドイツ改革派教会の在日宣教師たちの連絡を受けた本外国伝道局は女学校設立に協賛すると共に、二人の女性宣教師の派遣を決定した。プールボー（J. R. Poole）ほか一名である。プールボーは校長に就任した。宮城女学校の設立に参画したのはホーイとモール（J. P. Moore のちに第二代校長となる）、日本人は押川ほか二名であり、押川が理事長に当たる設立者（のちの校主）となった。⁽³⁵⁾こうして宮城県最初の女学校が発足したのである。

八八年宮城女学校は合衆国外国伝道局の協賛を得て東三番丁七十五番地に二〇〇〇余坪を購入し、翌年移転した。⁽³⁶⁾この地は現在青葉区中央四丁目六番地で、仙台一の高層ビル住友生命仙台中央ビルが建ちその前に小さな記念碑がある。良が通学したのはここであるが、彼女は一年足らずしか通学しなかった。黒光の言う「ストライキ」事件が惹起したためである。黒光は事件を概要次のように書いている。⁽³⁷⁾

校長プールボーをはじめとするアメリカ人教員が「日本の伝統を無視して」「何から何までアメリカ式に教育」した。「この無理に学校当局は全く気がつかなかった。これを問題にした小平小雪が明治二十四年八月校長に英文の建白書を提出、これに賛成した斎藤冬ら四人が改革案を当局に差し出した。校長と五人の対立は尖鋭化し、押川（すでに八九年に設置者を辞任している）らが仲介にはいったが埒あかず、翌年二月校長が全校生徒を前に「自制を失った」口調で五人の退学処分を発生した。五人は「落着いた

態度」で退場した。

こうした黒光の回想は狭い自らの体験と見聞を伝えているに過ぎない。宮城女学校の学園史もこの事件を僅か四行しか記述していない。事件の原因について、生徒の「日本精神を基調として教育して欲しい」という要求と共に、「ブルボーの報告によると『学校の管理運営を全面的に日本人に委ねる事を求めた』ものの様である」と書いているだけである。⁽³⁸⁾しかし同時に、九〇年宮城女学校の「規則変更」がおこなわれ、「学科から聖書を除き体操が加わり、倫理・国漢・英学・数学・理科・地歴・家事・図画・音楽が強化されている」と叙述しているのは、⁽³⁹⁾事件を知る重要な手懸りになる。

八年前に刊行された『ウィリアム・ホーイ伝』は、ホーイとブルボーが本国の外国伝道局に宛てた手紙類を丁寧に掲載し、事件の背景を考察する上での貴重な史料を提供してくれている。ブルボーの手紙から抜粋する。⁽⁴⁰⁾

「日本人は外国の影響に対し如みの気持が強いので、外国からの援助は熱望しながらも、これを自分たちの目的に従わせようと思います。日本人はまた権力を持つことが大好きです。(中略)もしも日本人に学校の中でわたしたちと対等の権利を与えてしまうなら、わたしたちの本来の意図はとても実現できないでしょう」。

(八八年、校地購入当時の書翰)

「押川は女学校を日本人の支配下に置くという提案を持ち出しました。(中略)わたしには日本の男性が、女子教育に配慮することができるとは思えません。(中略)もしも彼らの主張が通るようなことであれば、外国人教師の影響力は皆無に近くなり、効果も失われてしまうでしょう。そのようになった学校に、わたしは留まりたくありません。(中略)日本人は自分の国の文明開化が

外国人の指導のもとになされることに、我慢がならないのです」。

「仙台では、男子校が日本人の支配下にあります。だからわたしたちも困難な状況にあるのです。(中略)わたしたちに向けられている不満は、わたしたちが彼らに対し十分な愛国心を鼓吹していない、ということなのです。(中略)新聞はミッション・スクールに対する批判に満ちております。それを読むと日本に来ている宣教師は一致して、この国を非国民化し、腐敗させようとしていると思ひ込んでしまうほどです」。

「女のわたしが、押川先生の勧める方策に異を唱えるとなると、(中略)女としてわたしがまさっているといった思ひ上がりこそ、まことに女らしくないと説明されるのです」。(三通とも、九一年、事件本格化前の書翰)

黒光は事件の発端をつくった小平の積極性を認め、「突飛な小雪さん」と表現している。⁽⁴¹⁾しかし仮に小平が自らの発意で「建白書」なるものを出し、斎藤らが主体的にこれに賛同したとしても、押川とブルボーを軸とする対立や国民思想を国家主義へ方向づける動向に刺激・影響されての行動と見て間違いない。

条約改正を有利にしようとの発想で採られた極端な欧化政策に対して、一八八〇年代後半国家主義・国粹主義の思想が強まった。九〇年、前年の大日本帝国憲法の制定を基礎に、国民に忠君愛国の精神を涵養することを目的として教育勅語が頒布された。教育勅語は国民間に国家主義思想を普及するのに大きな役割を果たした。こうした風潮のなかで、宮城女学校でも聖書を学科から外す「規則変更」が実施された。小平の単独行動の前年である。激しい対立と議論があったであろう。

ブルボーの外国伝道局宛報告を分析すると四点の指摘が出来る。一つはキリスト教文化を「文明」と理解し、異文化を認めず、

「文明」の遅れた日本人を教化しようとする「正義感」が見られることである。手紙を読んで、筆者は内村鑑三の英論文「日清戦争の義」(義戦論)が北米知識層の支持を得たことを想起させられた。⁽⁴²⁾ 第二点は彼女が日本人の負の特徴を的確にとらえていることである。「日本人というものは外国人との約束は、守った方が得だと思ふとき以外は、決して守ろうとしないのです」と言い切っているが、これは現在でも問題にされている。第三点は国家主義が台頭するなかで、押川らがこれに即応した、あるいは少なくとも対立しない日本のキリスト教の「発展」を追求し出したことである。元来押川には学校教育を含めて教会を基礎とした事業の拡大がキリスト教の「発展」だと理解する面があったから、それは彼にすれば当然の方向であった。第四点は第三と関連して仙台のドイツ改革派宣教師らが彼らの考えるキリスト教主義に基づく教育方針をまもうとして、苦しい立場に追い込まれたことである。「ストライキ」事件は彼らの困難を一層深刻なものにした。

事件そのものは五人の退学処分と一件落着した。ホーイらが校長を支持し、押川は東北学院の教員が女学校に対して干渉がましいことは何もしないとの約束をした。⁽⁴³⁾ 押川に事件に係る策動ありとの疑念を抱くブルボーは彼に対する不信感を氷解出来なかった。彼女は事件後も「押川氏は男子校の校長としての自分に課せられている大変な責任について、得々として語るのです、女子校で同じ立場にいるわたしに帰属する責任感については、徹底的に無視します」と外国伝道局へ書き送っている。⁽⁴⁴⁾

ホーイは「学校経営を日本人の手に任せるまでは、事業に成功したとは言えない」と主張し、⁽⁴⁵⁾ 押川らに一定の理解を示している。しかし事件後その彼さえも「押川兄弟は立派な人物です。それだ

けに、どうも少しばかり多すぎる個人的野心を彼に吹き込む日本の友人たちから、彼が救い出されることは彼自身にとっても、わたしたちにとってもきわめて好ましいことと申せましょう」と外国伝道局に手紙を出すに至った。⁽⁴⁶⁾ 押川の野心的な行動は、松村介石が評したように、たとえ「己れ一個の功名利益の為」ではなかったとしても、客観的にはホーイのように理解されても仕方なかった。押川は国家主義への傾斜とこれに批判的なホーイとの不和は拡大し、日清戦後、前後して東北学院を去った。その後ホーイは活動の場を中国へ移した。ブルボーは彼の妻となり、行動を共にした。⁽⁴⁷⁾ 彼らと押川とは信仰の有り様や生き方を異にしていたのである。

事件で退学処分となった斎藤・小平を含む三人は押川の計らいで明治女学校へ、一人は青山女学校へ転学し、もう一人は押川の媒酌で婚約者松村介石と結婚した。彼女たちに一味同心した良は、引き留められたが、自主退学した。家庭の事情で出京するわけにはいかず、「焦燥」しているところを母親が察し、これを許可した。良は母親の「苦心」を思い「自分は不孝な娘」だと気が咎めもしたが、一方「古い家」の「重圧」からの「解放」を喜んだ。押川の配慮でフェリス女学校へ入学し、とくに英語の修得に励む心算を固め、九三年の春「出郷」した。⁽⁴⁸⁾ 内心の葛藤はあったが、良は叔母豊寿同様前へ進んだ。奇しくも豊寿が学んだミス・キダールの英語塾の後身フェリスで学ぶことになった。保証人は島貫である。

フェリス女学校は当時の横浜駅から南東へ二〇〇メートル全りの地点にあった。⁽⁴⁹⁾ そこは現地番で横浜市中区山手町三十七番地、フェリス女学院が存在する。良にとってフェリスは「ずいぶん西洋風」で「洗練」されており、設備は、冬にはスチームが通って

いる上、教室にはストーブが置れ、蛇口からは湯が⁽⁵⁰⁾出、至れり盡せりであった。

これより先、出京した良はひとまず神田の豊寿宅に寄居した。清水紫琴（古在豊子）の来訪があつて目を見張った。火災に遭つて佐々城家が豊寿の夫本支^{もとむ}の経営する日本橋の医院に転居した。良はそれを機に、入学と同時に寄宿舎生活を始めた。寄宿舎は食事も内容豊富で、食パン・牛乳・砂糖・鶏卵・食肉が出た。フェリスは各学科とも宮城女学校より程度が高く、とくに英語がむずかしかつたが、良の学力は増進した。良はフェリスで脚氣に罹り、誠意あふれる待遇の転地療養を体験し、音楽の女性教員から例外的に無償で一对一のオルガン教授も受けた⁽⁵¹⁾。経済的には苦しくとも、良のフェリスでの生活は充実していた。合衆国の援助を受けた学校の補助のお蔭である。

しかし良には、安息日には編物もしてはならないはずなのに、校長家族が日曜日毎に教会へ行くとき、人力車に乗り車夫を働かせていることが不可解であつた。そうした折、文学への関心を強めていた良は小平に誘われて星野天知を訪問し、これを機縁に鎌倉笹目ヶ谷^{ささめがや}の別荘への出入りを許された。そして良はこれを機縁にフェリスを中途退学し、天知の紹介で、黒光が当初から入学を⁽⁵²⁾念願していたと述べている明治女学校（高等科一年）へ転学した。九五年秋のことである。保証人の島貫にも無断であつた。この年の初め、島貫は日本橋の教会の牧師に就任していた。意表をつく良の特性発揮に母親や兄をも驚かせた。彼女が如何に生活費を切り詰めても、母や兄は経済的負担増を強いられることになる。本⁽⁵³⁾当に困つた良なのであつた。

明治女学校は八五年九月麴町区飯田町一丁目七番地（現千代田区九段南一丁目六番地）、九段下の牛ヶ淵端に創立した。創立の発

起人はオランダ改革派宣教師の木村熊二のほか、田口卯吉・植村正久・島田三郎・巖本善治^{いわもと ぜんじ}で、教員は木村・津田梅子ら四人であつた。翌年木村の妻鏡子^{きょうこ}（田口の姉）が取締に就任した。鏡子は熊二の留学中、田口経営の経済雑誌社の庶務・会計を担当した働く女性の先駆者である。明治女学校は外国ミッションを頼らず日本人の手で設立された最初のキリスト教主義の女学校である。僅か二ヶ月で鏡子が急逝し、八七年に熊二を助けて巖本が教頭に就任、一度移転してのち、九〇年に麴町区下六番町六番地（現千代田区六番町三番地）に再移転した。現在の日本テレビの筋向いに当たる。九二年巖本が校長に就任、最盛期を迎えた。

巖本善治（一八六三—一九四三）は但馬国出石（兵庫県出石町）生まれ。中村正直の同人社、津田仙の学農社に学び、木村熊二から受洗した。八四年『女学新誌』を創刊（翌年『女学雑誌』と改題）、女性の地位向上をめざして論陣を張った。八九年フェリス女学校教員島田甲子^{かしか}（文学者若松賤子）と結婚した。良が転学した年の教授陣には北村透谷は既になく、賤子や天知も退いていて、呉久美（第三代校長）・大和田健樹・青柳猛らがいた。彼女は短期間島崎藤村の講義も聴いた。良が入学して半年後校舎が全焼し、その五日後賤子が急逝した⁽⁵³⁾。良は仮校舎で一年、九七年春まで都合一年半学んだ。彼女の学校生活は物質的環境では恵まれなかったが、憧れの巖本の薫陶を受け、充実感を味わったことは大旨『黙移』・『広瀬川の畔』に回想されている通りであろう。

明治女学校は九七年四月東京府豊多摩郡巢鴨庚申塚六六〇番地現在の豊島区西巢鴨二丁目十四番地附近に五六〇〇坪を得て移転した。西巢鴨幼稚園前に記念碑が建っている。キリスト教人道主義を基調とする自由主義的理想主義を掲げたこの女学校は校舎焼失、賤子の病死などの不幸が重なった上、日本女子大学校など女

子高等教育機関の誕生、府県高等女学校の開設、キリスト教主義学校への圧迫の強まりという情勢の変化のために衰退し、一九〇九年廃校した。⁽⁵⁴⁾ 加えて巖本の背信行為が影響しているが、黒光は『黙移』で徹底的且恣意的に彼を弁護している。⁽⁵⁵⁾ 崇拜・尊敬の念が窺えるが、巖本の所業はキリスト教人道主義や女性の地位向上と無縁であり、黒光の評価に同調した、あるいは無批判の巖本美化は首肯出来ない。

四、相馬愛蔵との結婚とその後

良が明治女学校に転学した年、島貫は世話をする苦学生の一入でもあった彼女に結婚話を持ち掛けた。相手は長野県南安曇郡東穂高村（穂高町）の青年相馬愛蔵（一八七〇—一九五四）である。彼は一八九〇年東京専門学校（早稲田大学の前身）を卒業した。その間、押川・植村・内村ら明治期を代表するキリスト者の教示を受け、津田・島田・巖本らの知遇を得、同郷の木下尚江と親交を深めた。愛蔵は生家の当主相馬安兵衛の養嗣子に決定して翌九年帰郷、養蚕の改良にとりくむと共に地元の禁酒運動で中心的に活動していた。自由に振る舞い才気溢れる良にかつてアンビシヤス・ガールと綽名した島貫は、那須野原孤児院の援助に盡力する愛蔵の人格を見込み、押川と共に兩人に結婚を勧めたのである。⁽⁵⁶⁾ その頃良の知己の若い女性たちの間で一種の「恋愛至上主義」が流行で、彼女もその一人だったが、それに飽きて「楽な結婚の方へ歩んで行く人も少なくなかった」。しかし彼女は「易々と片付かない」「性分」で、島貫からの縁談だと「一も二もなく服すること」が出来なかった。そこへ二つの出来事があった。一つは親しかった布施淡が婚約したこと、もう一つは彼女の雑誌小説をもとにして新聞に中傷記事を書かれたことである。⁽⁵⁷⁾

布族淡（一八七三—一九〇一）は小山正太郎の不同舎に学んだ洋画家である。彼は仙台藩の本身（二〇〇〇石）⁽⁵⁸⁾ 布施備前の嫡孫であるが、苦学してのちに東北学院教授になった。在仙時代の藤村と同僚である。良とは祖父同志が知己であり、教会で一緒であった。⁽⁶⁰⁾ 良が彼から受けた芸術上の影響は、愛蔵と共に新宿の中村屋を開業したのちに開花する。布施の絵は管見の限りではやさしさに満ちている。

良は布施について『広瀬川の畔』の其所彼所で回想しているが、彼の婚約問題に限れば、「あれほど親しくしていた淡さんと私が結婚しないで、他の女性と結婚するといっても、そこに不思議はない」と認め、彼の「友情には感謝し」「清らかな人柄には深く敬服していた」が「私はもっとと精神を打ち込み、生命を焼きつくすような激しさが欲しい」「やさしい性格」では「びったり寄り添えない」と記し、「妙に淡さんもかくしたものです。『裏切られた』とこれがその当時の偽らざる気持ちでした」と述べている。淡の婚約者は良が紹介したフェリス時代の友人である。それなのに「どうして報えてくれないのか」、だから「裏切られた」と実感したと良は言うのである。⁽⁶¹⁾

しかし一方で良は結婚後三年の一九〇〇年一月、『夜叉鏡』に「昔より男心を秋の空にたとへて、変り易き物の張本に数へおくもげに理りなり」の書き出しで、「甘き露を吸ひ盡せば、後は用なしと弊履を捨つるが如く、能く彼が愛人を捨つるなり」と一般論を述べつつ、「奥州男子は、男は好くて真面目なれ共、武骨で、無風流で、気転がきかず。其上間がぬけて、小胆で、宝の山に入りながら、ミス／＼人に渡して、至つて平気なり」と記している。これは続けて「信州男子は、金もうけに巧みなり、殊に妙を得たるは、とばけた真似をするとき也」とあるから、「奥州男子」は布

施と見て誤りはない。⁽⁶²⁾こうした本根が四十年程後年には「広瀬川の畔」の叙述のように整えられたと思われるが、この著にも布施の婚約に「刺激」されて「一足さきに、あの人たちを出しぬいてやろう」と、「今思えばあさはかな」ことを考えたとも回想している。⁽⁶³⁾矛盾と見える程に複雑なのがこの道で、二者択一するような論調には与みし難い。

良の心は複雑であったが、彼女は、件の記事で「誰よりも先に」「交渉を差し控えるはず」の人が「事件を明確に判断し、いささかも、そこに疑いや迷いの色がない」ことに気づき、「はっ」としてはじめて信濃の方へ向き直り」「どういう人なのだろう」と真剣に考え出した。そして先の事件とも係って才能や作風を自己評価し、小説家志望の夢を棄てて結婚を決意したのである。⁽⁶⁴⁾

良と「とぼけた真似をする」人との結婚式は新郎がかつて受洗した日本基督教会の牛込弘方教会でごく簡素に挙行された。九七年三月二十日である（十九日ではなく）。結婚式前後の様子は島貫の「牧会日誌」に詳しい。三月八日午前島貫は「佐々木春寿氏、良子」の「来訪」を受けた。同日午後押川を訪問して「三時間余り談話」したのは良の結婚式のことも含まれているだろう。十八日午後「星良子の結婚に付て」「佐々木春寿氏を訪」ねた。十九日の条には夜「相馬氏も来訪したる由」とあり、出京した愛蔵は先客と「応接」中の島貫と面会せず帰ったようである。同日の「明日の課程」には「相馬氏の結婚式の為に六時間を費すべし」とある。⁽⁶⁵⁾

巖本・豊寿・島貫連名の結婚式案内状には「相馬愛蔵星良子兩名契約被相整」「押川方義氏司式の下に結婚式挙行候間」云々とあり、押川が司式することになっていたが、突然のように良も所縁のあるモールに代った。三月一日「上野に迎」えて以来二十六

日の帰仙まで、押川の二十六日間の在京中、島貫は少なくとも半分の十三日は面談しているが、十九・二十日の両日は同席した形跡がない。島貫の日誌二十日の条には「午前九時より相馬氏結婚に付てモール氏に往き司会者を頼む」とあり、司式が急遽変更になったことが知られる。島貫は一旦帰って教会の「雑務」を処理し、「相馬氏の結婚の為に牛込教会に往」った。「式後富繁軒に晚餐」会があった。⁽⁶⁷⁾祝宴（「広瀬川の畔」には「富士見軒」とある）には佐々城豊寿夫妻や潮田千勢子ら数十人が出席、酒抜きで一人前五十銭の定食が出された。式・祝宴共、愛蔵・良の親・きょうだいは出ていない。⁽⁶⁸⁾

黒光も諸書も仲人なる語を使用しているが、案内状にもある通り結婚という「契約」に神の前で立ち会うのだから、巖本と島田甲子の結婚式における中島俊子（湘煙・信行の場合と同様、証人だったのではあるまいか。ともあれ島貫の妻は産後間もないとのこと）で巖本が彼女に代って良の介添えをした。⁽⁶⁹⁾ただし島貫の日誌は月半ば前、数日にわたって妻の病気に触れているが、出産は記されていない。「牧会日誌」のためか。また黒光は「思い出多い東京を離れて、信州へ立つ日、島貫さんと私達二人は上野で落ち合い、上田まで島貫さんに送られ」「翌朝は、名残り惜しくも、島貫さんとお別れし」たと書いている。⁽⁷⁰⁾しかし牧会を開始し力行会を創立したこの年、島貫は実に多忙で日誌を通覧しても夫妻に上田まで同行する寸暇は全く見出せない。

愛蔵・良は上田で一泊し、妻は人力車と馬を乗り継ぎ、夫は徒歩で保福寺峠を越えた。黒光は「広瀬川の畔」を「保福寺峠に立ちて」で終わり、次作『穂高高原』を「保福寺峠」から書き始めている。両著とも「人生行路難を暗示する」ような「重畳として連なる高山大嶽」に愕然とした心情を認めているが、これは四冊

の山々がまだ真冬だった所為もあり、とくに『穂高高原』の叙述は穂高での田園の憂鬱を反映させたものであろう。夫妻は松本の木下尚江宅で一泊した。木下の母に良の「里代り」を頼んであった。良は彼と初対面である。翌日先着の蒲団包み二個と人力車で持参した行李二個とが相馬家から迎えの荷車に積まれた。兩人は二台の車の人となり、糸魚川街道を走って穂高入りした。⁽⁷²⁾

東穂高村は白金耕地にはいると、良は「男女老幼いろいろの顔」に「見られ」た。数回にわたって「婚筵」が催された。婚宴で良が着たのは「喪服と変りがない」ような教会で着た「式服」だけだった。「簞笥長持、そして衣裳の数が嫁の資格を決定する」「土地」の「通念を破る」二人の結婚を可能にしたのは長兄・義兄にして養父・義父に当たる十二代安兵衛の存在であった。⁽⁷³⁾ 最初、良を驚かせたのは玄関右隣の十八畳の洋室であつた。暖炉があり、天井中央には大洋灯がさがっていて、彼女は「一種剛健な浪漫的のにおい」を感じた。⁽⁷⁴⁾ 中島博昭氏が言うように、洋室は安兵衛が「村の青年たちの語らいの場を望む愛蔵の意向を汲んで」自ら設計したものである。⁽⁷⁵⁾ 黒光のために洋間を増築したとする伝説は臼井吉見の長篇小説によって流布されたが、既に一八八九年頃に建てられ、禁酒運動の会合などに利用されていた。⁽⁷⁶⁾ 良が持ってきた不同社出身の長尾奎太郎画「亀戸風景」は彼女が萩原守衛（碌山）に与えた一種のカルチャー・ショックの象徴だが、今も洋室に懸けられており、同じくオルガンもここに置かれたが、これは研成義塾に寄贈され、現在井口喜源治記念館に展観されている。油彩画とオルガンのほかに良の持参品で価値あるものももう一つあった。巖本が木村と明治女学校の有力な後援者だった勝海舟に良のために揮毫してもらった書「浩歌待名月」である。李白の詩「春日醉起言志」の一節で、「春日に酔いから起き」、新たな

「志」を持った良に、田園で「浩歌して名月を待」とうと激励したのであろう。海舟は佐久間象山ら先覚者の犠牲を「為^ツ殘^ル所^ト傷^ム」た「先^ニ於^テ春^ニ」つ「花」に譬え、これを称えたように、譬喩の名手であつた。しかし良は夫の養蚕を理解しようと桑摘みにも出、蚕の飼育を手伝ったりもしたが、彼女にとって田園生活はきびしく、村人とも馴染めなかった。

悩みに悩んだ挙句、体調を崩した良は一旦帰仙したあと、一九〇一年愛蔵とともに出京することになった。自分の「求めてやまぬものは都会を離れた遠き田園の中にあるのではあるまいか」、「塵を払ってその田園に隠れよう」、「心を虚しうして世の慣わしに従い、人の妻となろう」と決意した良であつたが、四年にして夫と共に再び東京の人となった。この件について良は「故郷の舅姑は」「年もまだまだ若うございましたし、私どもがいなくても何の不自由もないのです」と大変呑気なことを言っている。⁽⁸⁰⁾

十二代安兵衛は末弟の廃嫡を認め、のちに次弟宗次が本家を継いだ。宗次は街道沿いに分家して商売を発展させていた。九四〇七年愛蔵や井口らの禁酒会が芸妓置屋設置反対運動を展開していた際、彼は激しい妨害のなかで自宅を演説会場に提供するなど、彼らの運動に協力した。⁽⁸²⁾ 宗次は本家を継ぐ段になると、「本家を凌ぐ産を成した」にもかかわらず、商売をやめて「農業一本の本家の保持に一向に挺身」した。⁽⁸³⁾ 宗次も兄と同様素封家を守ろうとしたのである。廃嫡は兄弟三人で協議した。激論があつたかも知れない。良は二人の兄嫁と同様に協議には加えられなかった。病身への配慮か、女性の故か。しかし明治憲法に基づく民法が施行されて三年、女性がその第十四・十六条で無能力者扱いされていたことである。愛蔵と黒光、若い二人の自由を容認していたところに（徐々にではあるが）、安兵衛と宗次の自らの内心の

近代化をはかろうとする努力が窺えると言つてよい。

それは明治初期以来の穂高の思想的環境とも係つていようが、別の課題である。精神の近代化がジクザクを辿りながら進んでいく様の一端を垣間見て、攔筆する。

〔註〕

(1) 「穂高を歩く——相馬黒光を中心に」(一九九三年一月十二日)、「相馬愛蔵・黒光夫妻と二人をめぐる人びと」(一九九四年一月十四日)。後者は文京シティテレビで放映したCM込み二時間。九四年六月十四日。

(2) 煩瑣になるので、一々該当文献を挙げない。

(3) 宮城県立図書館所蔵。宮城学院史料室の複製に拠った。

(4) 青葉区支倉町四番地の仙台市民会館附近との推定があるが、大幅なずれがある。

(5) (8) (10) (18) (24) (25) (32) (51) (61) (63) (68) (70) 相馬黒光『広瀬川の畔』(一九八一年、郷土出版社)一一一―一三頁、一九・七四頁、二〇頁、八七頁、二〇頁、十九頁、一三〇―一三一頁、一四三・一四五・一五三・一五七頁、二〇六―七頁、二〇八頁、二一五頁、二一七―八頁。

(6) 雄記・磐溪とも菊田定郷編『仙台人名大辞書』(一九七四年、歴史図書社)参照。この辞書は誤りが多く注意を要する。

(7) 近世村落研究会編『仙台藩農政の研究』(一九五八年、日本学術振興会)三一―三三頁。

(9) 前掲『広瀬川の畔』一九・二〇頁、宇津恭子『才藻より、より深き魂に——相馬黒光・若き日の遍歴——』一七―二三・三〇・一〇二頁。

(11) (15) 成澤榮壽・馬原鉄男『部落の歴史と解放運動 近現代篇』(一九八六年、部落問題研究所)拙稿一六五―六頁、一六六頁。

(12) 仙台教育委員会編『仙台の教育一〇〇年』(一九七三年、仙台教育委員会)一八頁。山田貞光氏は「正確には片平丁小学校であった(尋常となるのは、卒業年次の九月だった)」と思われる」と

記述している(「相馬愛蔵・黒光伝」(前掲『広瀬川の畔』所載))。

(13) 前掲『仙台の教育一〇〇年』九―一〇頁。需者岡千仞は尊王論の立場から奥羽越列藩同盟に反対して下獄、維新後、国会図書館の前身である東京書籍館(七五年改め、東京府書籍館)の館長を勤め、七〇年、東京に開いた綴帙塾では原敬・片山潜・尾崎紅葉・北村透谷らに教授した(拙稿「加藤拓川小伝」(「長野県短期大学紀要」第四八号))。

(14) 当時は初等科を終了とは言わず、卒業の語を用いた。

(16) 前掲『仙台の教育一〇〇年』二二頁、仙台市立東二番丁小学校編『伝統 東二番丁小学校創立百年記念』(一九七三年、東二番丁小学校)参照。

(17) (23) 仙台基督一致教会「会員名簿」は東北学院史料室の複製に拠った。

(19) 仙台基督一致教会「明治二十一年四月一日ヨリ 受洗入会者摺帳」(仙台東一番丁教会所蔵)は東北学院史料室の複製に拠った。

(20) 前掲『才藻より、より深き魂に——相馬黒光・若き日の遍歴——』一一三頁。氏は授洗者が押川でないと断定せず、慎重である。

(21) 「仙台東一番丁教会史」編集委員会編『日本基督教団仙台東一番丁教会史』(一九九一年、仙台東一番丁教会)二四六頁。

(22) (34) (37) (41) (50) (52) (55) (57) (64) (69) (79) (80) 相馬黒光『黙移』(一九八一年、郷土出版社)一八頁、二〇頁、二一―五頁、一〇〇―一頁、三二―三頁、三六―九頁、四二―三頁、五四―六〇頁、一四八―九・一五一・一五三―四頁、一五三―五頁、一五五頁、一五九頁。

(26) 前掲『日本基督教団仙台東一番丁教会史』参照。仙台基督一致教会は、その後、仙台日本基督教会などと改称し、現在は東一番丁教会である。同教会は片平一丁目十三番地に存在する。

(27) 東北学院百年史編集委員会編『東北学院百年史』資料篇・各論篇(一九九〇年、東北学院)、前掲『日本基督教団仙台東一番丁教会史』、ウイリアム・メンセンデック『ウイリアム・ホーイ伝——苦闘の生涯と東北学院の創立——』(出村彰訳、一九八六年、

東北学院) 参照。

- (28) 前掲『広瀬川の畔』一一四―五頁。押川の墓は東京の雑司ヶ谷墓地にある。仙台市青葉区北山一丁目十四番地曹洞宗金剛山輪王寺のキリスト教墓地に分骨されている。

- (29) 「基督教界の人物 押川方義君」(『警世』第二九号)。「警世」は松村介石主宰のキリスト教人道主義的立場の雑誌。

- (30) (31) 拙稿「社会運動家難波英夫とその人道主義的源流」(『部落問題研究』第一〇三輯)。

- (33) 「力行世界」第二七号(島貫先生記念号)。島貫の墓は東京の染井墓地にあり、碑銘は押川の筆である。巖本善治・若松賤子夫妻の墓もここにある。

- (35) (36) (38) (47) 宮城学院八十年小誌編集委員会編『宮城学院八十年小誌』(一九六六年、宮城学院) 一五―六頁、一八頁、一九頁、一六頁。

- (39) 前掲『宮城学院八十年小誌』一九頁。国・漢も強化されたところだが、「規則変更」の翌年に入學した黒光は「それは単に科目としてあるだけで、上級も下級も同じ本を読まされているという状態」だったと書いている(前掲『黙移』二三頁)。

- (40) (43) (44) (46) 前掲『ウィリアム・ホーイ伝』一一八―二二頁、一二二頁、一二二頁、一二六頁。

- (42) 「内村鑑三選集」第二卷(一九九〇年、岩波書店) 所収。のちに日露戦争における代表的非戦論者となったキリスト者内村は「新文明を代表する」日本が「旧文明を代表する」中国と戦うことは「実に義戦なり」と論じた。

- (45) プールボーの事件勃発後二通目の書翰(前掲『ウィリアム・ホーイ伝』一二〇頁)。ホーイの主張に対し、プールボーは、「成功」が多く生徒を集めることを意味するならそうかも知れないが、「しっかりとしたキリスト教的生き方」で育てることを意味するなら否であると、「異論」を唱えた。この点でプールボーは押川と意見を全く異にしていた。

- (48) 前掲『黙移』二六・三〇―三二頁。仙台基督一致教会の前掲「第壹号会員名簿」に小平小雪の名がある。札幌から「廿三年二

月十九転入」とあり、前掲「受洗入会者扣帳」には「札幌教会ヨリ二月十九日附ニテ移籍」とある。明治女学校在学中のことである。

- (49) 一八七五年新橋・横浜間にわが国最初の鉄道が開通した。横浜は現在の桜木町駅で、現横浜駅は一九一四年高島駅として開業、翌年横浜駅と改称された。したがってフェリスが駅から遠かったとの記述は当時存在しなかった現横浜駅から起算したものでらう。

- (53) (54) 青山なを『明治女学校の研究』(一九七〇年、慶応通信) 参照。

- (56) (81) 拙稿「穂高を歩く」(『月刊どの子も伸びる』一九九三年二月号)。

- (58) 「大正期美術の煌き——相馬黒光と芸術家たち」(一九九〇年、宮城美術館)、「教員会記録」(東北学院所蔵) 参照。

- (59) 「教員会記録」(東北学院所蔵)。

- (60) 前掲「受洗入会者扣帳」。布施の受洗は良より遅く一八九〇年九月七日、仙台神学校生のときである。

- (62) 「女学雑誌」第五〇四号(一九八四年復刻再版、臨川書店)。第五〇六号に「夜又鏡」(第二回)が掲載されている。「夜又鏡」は黒光の筆名で書かれた最初の文章であろう。これは前年の春から夏にかけて青柳有美(猛)が連載した女性評「鬼面百相」(十回プラス「鬼面百相の弁」)を念頭に書かれているから、全体的には一般論の、あるいは一般論を装った文章である。

- (65) (67) 相沢源七・史料紹介「島貫平太夫『牧会日誌』と『家庭日誌』(上)」(『東北文化研究所紀要』第二四号)。

- (66) 井口喜源治宛結婚式案内状(井口喜源治記念館所蔵)。

- (71) 前掲『広瀬川の畔』二二八頁、相馬黒光『穂高高原』(一九八〇年、郷土出版社) 一四―五頁。

- (72) (73) (74) (83) 前掲『穂高高原』一八・二〇―二二頁、二七―二九頁、四〇頁、二五〇―五一頁。

- (75) 「解説」(前掲『穂高高原』所収)。

- (76) (82) 相馬安兵衛氏(当主、十五代) 教示。

- (77) 「李白全詩集 下巻」(統国訳漢文大成、一九七八年、日本図書



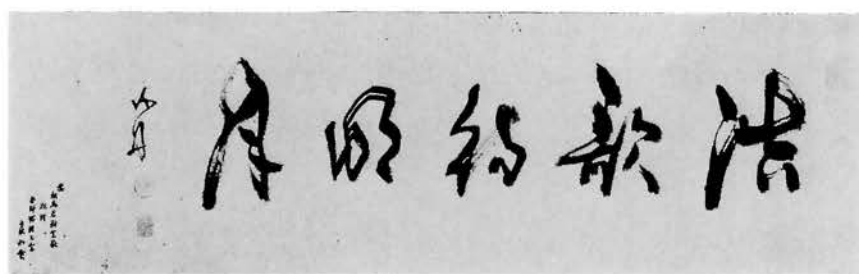
〈安政補正改革仙府絵図〉

——星雄記（相馬黒光祖父）宅が見える——

（78） センター）四三九～四〇頁。
 拙稿「近世後期における人間観の小考察」（『長野県短期大学紀要』第四五号）。

〔付記〕

1 穂高町の相馬安兵衛氏、東北学院広報室長松浦平蔵氏、株式会社
 中村屋広報課長田嶋和彦氏、仙台市立東二番丁小学校教諭伊深正文



〈勝海舟書「浩歌待明月」〉

——株式会社中村屋提供——

氏、東洋英和女学院大学前教務課長宮坂育子氏、井口喜源治記念
 館・宮城県図書館にお世話になった。心からお礼申しあげる。
 2 相馬黒光の著書は郷土出版社発行の『相馬愛蔵・黒光著作集』を
 使用した。

3 小論はあらたな誤りを生み出したかも知れない。ご叱正を乞う。